

気がついたらSNGK

まうす

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

アレスタ秤出るといふ事であえて消された未来のGOの世界。

SNGK先輩に転生した少年がなんとか頑張るお話。

「もうクソザコブロッコリーなんて呼ばせない！」

(注意) 作者は三国先輩大好きですのでそこらへん把握おなしやす

# 目次

絶望的なZARU	1
雷門元キャプテンSNGKの今	5
黒の氣志團 vs ブロッコリー雷門	9
革命の風	14
牙を剥くSNGK。壊れたのは原作でし た。	18
教祖ENDU現る	25
キャプテンってのはだな	30
あんかけ蟹チャーハン	34



# 絶望的なZARU

イナズマイレブンの世界に転生という二次創作物を見ていた俺はその手の世界観に憧れていた。

皆が皆原作知識を持ち合わせていて、オリジナルキャラでヒロインを持って将来はプロサッカー選手として活躍。教祖の円堂守や治療家の豪炎寺修也といった作品の花形とサッカーができる。このような出来事を2度目の人生として体験できたらどれ程良かったのだろうか……

「なんで俺、SNGK先輩なの!？」

事の発端は神様が間違えて殺しちゃったから転生させてあげるおつていうテンプレート展開だ。

俺は神にイナイレの世界に転生させてほしいと言うのと必殺技の習得をしやすくしてほしいというのと技の進化を早くしてほしいという特典をもらえるように頼み、転生

することになったのだ。その後暫くは何事もなかったかのように過ごしたのだが、ある時違和感に気がついたのだ。

「太一！ サツカーしようよー」

「三国！ 俺のシュートを受けてみる！」

そう、皆が俺を三国や太一と呼ぶのだ。嫌でも気がついてしまった俺はorz状態になつてしまうのも無理はない。

「俺、クソザコブロッコリーじゃないですかやだあ」

クソザコブロッコリーってのは三国太一のネットでの蔑称でバーニングキャッチやフェンス・オブ・ガイアといったセーブ率がクソみたいな技を連打して化身相手にはもはや確定敗北演出みたいな扱いを受けていた。さらに、映画ではゼロ・マグナムを止めた無頼ハンドをアニメ初登場で破られるという不遇っぷり。初登場でセーブできないと言うのが初だったために視聴者には大きな衝撃が走つただろう（適当）

ちなみにだが、クソザコピカチュウじゃなかったのがせめての救いだと思つてしまつたのは秘密だが俺には一つの希望があつた。

「ゴッドハンド……X！」

三国に転生能力が合わさつたことによつて本来なら2のラストで習得が判明する

ゴッドハンドXを雷門に入る前に習得できた事だろう。個人的に世界編でゴッドハンドXは消費TPが45の威力なのに対してGO3では70になっているあたり、パワーのインフレというより弱体化してね？という疑惑がたつてしまう。

つまりゴッドハンドXを進化させてタマシイ・ザ・ハンドを身につければアームドシユートも余裕で止められるんじゃないかね？という安易な思考によって俺は雷門に入るまでに死ぬほど努力した。……え？バーニングキャッチ？雷門に入ってから覚えるんで許してください。

そもそも赤いゴッドハンドが出せる段階でバーニングキャッチなんていう威力換算30の技よりTP消費2増やして威力換算40のゴッドハンドのほうがまだ止められると思うんですよ。はい。というよりムゲン・ザ・ハンドと無頼ハンドが大体同じ威力つてのがそもそも驚きなのだが所謂立向居的なポジションなのだろうか俺は。しかし、雷門に行くにあたって懸念点がある。フィフスセクターの勝敗指示は主人公の天馬がくるまでとりあえず囁ませ技のバーニングキャッチでやり過ぎすとしてKRMDとかAMGだ。

同級生としてのよしみで試合には出してあげたいが、AMGはまだしもKRMDに関してはシュポシュポ言ってる雑魚DFだ。ENDU時代のDFは壁山という強力DFを始め後に出てくる木暮や飛鷹や土方、宮野まも……吹雪のような守りに入れる奴らに

F Wが止めてくれたりと仲間の保険が強い。それに対してG Oになってからは基本は俺が吹っ飛ばされるといふ作画の使い回しばかりだ。そういう意味で俺は単体で強くならねばという事でキーパー技だけでなくシユート技やドリブル技といったリベロにもなれるように特訓した。

まさに自分をE N D Uと勘違いしたクソザコブロッコリーとか言う動画を上げられそうだが俺はただのクソザコブロッコリーではない。最強のブロッコリーなんだ！（そうじゃない）

「もうクソザコブロッコリーとは言わせない！」

正直、サッカーが泣いてるとかフィフスセクターとか時空最強イレブンや地球の危機とかどうでもいいんでこれだけを信念として頑張ります。



## 雷門元キャプテンSNGKの今

「俺はフィフスセクターに対抗はできない。神童、キャプテンを任せるぞ」

どうもSNGKです。雷門に入ってからサツカーは作業ゲーといってもおかしくないぐらいにつまらなかつた。試合勝利を管理して何が平等にサツカーなのか全くわからないがあまりにも暇すぎたので皆に必殺技を覚えさせたりと魔改造雷門にキャプテンという地位を使って育て上げた。具体的にいうなら神童が皇帝ペンギン2号が使えたり倉間にグラディウスアーチといった過去作でも中々に使い勝手のよかつた技を覚えさせたことによつて支配された試合だとしてもボールの支配率は雷門が70パーを占めることが多かつたのは悪くないと思うのだ。というより、実際にSNGKになつてわかつたのはマジでバーニングキャッチが使えないということだ。雷門のメンバーは俺がバーニングキャッチとかいうクソザコ技しかないと思つてるが、絶ゴッドハンドXやタマシイ・ザ・ハンドG4といったロココの使つてた技をマスターしているしXブラストのようなシュート技までばっちり習得してる、マジで転生特典に感謝である。とか言いつつSNGKは原作でもやり方教わつて特訓しただけで真ゴッドハンドXを身につけているあたりセンスはあつたんだらう。ただ化身とかいうインフレとピカ

チュウウの所為でキーパーの座を取られてしまっただけなのだ。そして皆も知っているだろうがゴツドハンドXは2の終盤に出てくるキャラの化身シユート程度は止めてしまふのだ。こんなことしたらファイフセクターから目をつけられそうなので俺は今まで使わなかったというわけだ。

ちなみにだが、顧問の音無先生や監督の久遠さんからは時たま変な視線を感じたが知らぬが仏というので気にしなかった。最近の悩みはそこらへんのシユート技は本気を出す（バーニングキャッチを使わない）と片手でキャッチできるという所だろう。SNGKはバーニングキャッチを使うと弱体化補正が物語的にかかるようだ。このままだと無頼ハンドとかフェンス・オブ・ガイアでもかかってしまうなと思うあたりアウト・オブ・眼中な技になってしまいそうだ。だが、物語的に皆には成長してもらいたいので俺は頑張ります。

「三国、ちよつとこい」

長々とこの世界であったことを振り返っていると久遠監督から声がかかる。

「はい、監督。なんでしようか」

「お前は何で本気を出さない」

まさかこのタイミングで切り出されるとは思ってなかった。隣にいる音無先生は驚

いていないがマネージャーたちは驚いてるようだ。

「まだその時じやないからですよ。革命時代が動くの風時に俺はその剣を抜剣します。久遠監督だつてその時を待つてるんじゃないですか？」

俺が少し挑戦的な笑みを浮かべながら久遠監督に向かっていうと向こうも何を考えているのかわかつたらしく笑つてくれる。

「わかつた。是非三国のいう革命の風に期待しよう」

そんなやりとりをした数ヶ月後、松風天馬という革命の風、剣城京介というシードが俺たちの目の前に現れるのだった。

(久遠 side)

三国太一。奴は円堂達が世界一になってから10年ちよい経つた世代の雷門の守護神としてプレイしている男だが一年の頃からずつと強さが変わらないのだ。

まるで最初から手を抜いているのではないかと言わんばかり……

奴のプレイを見てみるとFFI決勝戦のGKであるロココ・ウルパを凌駕するセンスを感じるのだがどうなのだろうか。故に奴に聞いて見たら案の定本気は出していないというではないか。確かにこのような管理サッカーでは本気が出せないのかもしれないが本気を出せばバーニングキャッチなどというクソザコ技しか覚えていないという醜態は晒さないだろうにと俺は思うのだが……彼の本気というやつを是非見てみたい

と楽しみにしよう。……そうだな、今日の晩飯はブロッコリーサラダを出そう。他意はないぞ。うん。

# 黒の氣志團 V S ブロッコリー雷門

どうも、S N G K です。

黒の騎士団との試合がこれから始まります。これから Z A R U を演じて松風天馬を引つ張り出して化身覚醒まで持つて行かなくてはいけないのがとても辛いです。デスソードぐらい素手で取れるわ!とか思いながら俺はゴールキーパーの位置に着くとフオーメーションを確認する

雷門

F W 南沢 倉間

M F 神童 浜野 速水 水森

D F 天城 車田 霧野 小坂

G K S N G K

黒の騎士団

F W 劍城 稲葉 貴崎

M F 天野 伊勢屋 三定

D F 森川 牛島 大門 柳  
G K 鉄雄田

といったフォーメーションだ。今回も俺はバーニングキャッチ以外は使わないと決めているがどう転ぶかなあと少し不安である。

そして試合が始まると黒の騎士団が空中でダイレクトパスを繰り返す。

「なっ!? いっつらー!」

南沢達が驚くと貴崎がゴール前にてボールを受け取る。

「オラア!」

ここで三国なら油断したと言ってゴールを許すのだろう。流石にハエの止まりそんなモブのシュートで点をやるわけにはいかないのでパンチングをして跳ね返す。

「へえ、ちよつとはマシなゴールキーパーだな」

そう言つてシードの剣城はこぼれ球を拾う。と言うかD Fさんがカバー入らないのは有名な話だったがここまで露骨にキーパーがサンドバックになるのは辛いものがある。おい、K R M D。シュポシュポ言つてるだけしかできないんだからそのぐらい働いてくれ。

「ふっ、デスソード!」

劍城はそのままデスソードを放ってくる。アニメ一期最強のデスドロップと違ってデスソード程度ならキヤッチで抑えられるのだが、そろそろお約束の展開を見せたいと思う。

「点はやるか！バーニングキヤッチ……ぐあああああ」

いくらバーニングキヤッチにマイナス補正がかかるとはいえキーパーとしての能力は原作三国の3倍はある。しかし、バーニングキヤッチは俺自身の能力に0.2を掛けた数値が能力となる。単純にキヤッチなら100出せる状態だとしてもバーニングキヤッチを使うと20しか出せないのだ。実にかませである。

「あのSNGK先輩が簡単に破られるなんて！」

チーム内で俺が失点したことによって動揺が走る。側から見たらSNGKが力負けたように見えるからだ。無論、ストーリー補正というものがあって本来の実力の何倍も出るようなパターンもあるがそれは基本主人公たちが進化してそれに比例して周りが進化する時のみだ。さらに言うならアニメなどで初登場の技は基本セーブ可能だ。世界編での怒りの鉄槌は本来ならカオスブレイクを止められないがアニメだったりゲームで初めて打つときは止めているようなのが所謂補正という奴だ。そんなジंकスを破ったとして有名な俺が俺なわけだが気にしてはいけない。

その後も劍城のデスソードをバーニングキヤッチと舐めプを重ねて7点ほど失点す

ると監督が南沢を交代させて松風を入れる。ここから時代が動くんだなあと思って感動していると劍城がデスソードを放つ。

「三国!」「三国先輩!」

感動してたあまりバーニングキャッチの発動が間に合わない!と焦ったあまり手前に出したらデスソードを片手で止めてしまった。

「あ」「は?」「ええ!?!」

俺が素つ頓狂な声を上げると同時にありえないという顔で劍城が、周りはバーニングキャッチじゃ止められないのに素手なら止められるのかと驚きである。

「松風!お前にボールを託すぞ!」

俺は何事もなかったかのように松風にボールを渡すと試合は規定路線に戻り、見事神童がマエストロを出して試合が終わった。

「なんとか助かったのか?」

誰かのその発言でなんとかその場は終わったが、そんなことより劍城のシュートがあまりにも弱すぎてリアクションに困ってしまった。このままだとロストエンジェルすらゴッドハンド改で止められそうなレベルだ。後は演出的な面を考えて2つ以外の技も欲しいしなんとなくだけでも最終奥義みたいな技も欲しい。

……久遠監督に頼んで旧イナズマジパンのメンバーにアポを取ってもらって修行



でもしようかなあ……

(おまけ)

「プロッコリーサラダ！」

「!? 神童、寝てなきやダメだ！」

「プロッコリーサラダが食べたい。と言うか食べなくては行けないんだ！」

「と言う夢を見てな。霧野」

「神童……」

Orz 状態の霧野と変な夢を見たせいで疲れた神童がいたとかいないとか

## 革命の風

どうもSNGKです

これから練習です。え？剣城？昨日無理やり入部してたしサッカーが悲しむ発言もこなしたよ？剣城君からは睨まれましたが何かよくないことをした訳ではない……はずだ。今日は松風君達のテストなんですけどそんな中、俺はサクツと特別メニューをこなすことにした。

「んじや、俺専用のメニューこなしてくるわ」

「は、はい。今日は何分ぐらいですかね」

「大体30分だと思おう。その後になつたらシユート練を受けよう」

事の発端はこうだ。

あれ、雷門の練習緩くね？と思った俺はただひたすらに全力で走り続けひたすらに筋トレをして武術を身につけると言うトレーニングだ。

やはり物理法則が息していないこの世界でも基礎能力は大切で、身体能力が高ければ高いほど世の理を破壊できることを俺は知っている。ちなみに武術といったが、後に見える機会があると思うのでその時に解説しようと思う。どうせこの後鬼道が現れて

ずっと基礎練習しかないんだしその時に楽ができたらいいな程度で思っていたのでまさかの展開である。と言うか雷門のメンバー、ボールを使わずに基礎練習だけになった途端つまらないとか言うのはどうなのか？いくら超次元サッカーとはいえ基礎をおろそかにして勝てるほどの世界は甘くないだろう。え？化身やアームド、ミキシマックスにソウルといったスーパーパワーはSNGKを名乗るにあたってそこら辺の事は一切考えなかった。必殺技の練習よりセカンドボールの処理とかそういう地味だけど超絶大事な事をしてください。マジでパンチングでのボール処理ができなくなりません。

セカンドチームにいたのは短く、割とすぐにファーストに上がったこともありキャプテンを務めたこともある。しかし、俺はENDUではなくSNGKというコンプレックスからとりま改革できねえから神童キャプテンよろ！みたいな感覚で投げた。後は……ブロッコリーなのに学生生活では比較的女に囲まれることが多いという事だろうか。転生前はこれでも国公立の大学に行くぐらいには勉強をしてたサッカー雑魚だった。

中学生なんてサッカーができて頭良ければとりあえずモテるらしい。残念ながら彼女いない歴〓年齢にはその感情はわからないワケだが。

時たま『三国不正だー！』という声が聞こえるがシユートは防いでもテストは不正で

ない。

いつもの通り誰に説明してるのかわからない回想をしながら体を動かしていると帰宅部だったり文化部の人たちが声をかけてくる。実に人気者になった気分です。トップカーストの人間とはこんな感じだったのかとしみじみと感じる。

(今日はブロッコリー食べよう)

(く〇寿司行こうぜ！)

SNGKの影響でブロッコリーやく〇寿司の売り上げが跳ね上がっていることを彼は知らない……

「ん、合格者は松風とピカ……西園か」

「はい、三国先輩。よろしくお願います！」

「よろしくお願います！」

松風とピカチュウが挨拶してくる。

それにしてもピカチュウがとまっちゃんとかマジ違和感しかない。いくえさんだろ！と心の中で半ギレしながら2人の育成方針を考える。

「よろしくな。2人とも期待してるぞ」

そう言ううと2人は笑顔になる。ここからが革命の時間だ!!

やはりピカチュウにはボルテッカーやエレキボール。アイアンテールや10万ボルトといったサトピカイメージなのだ。対戦環境的な意味で使うならめざ氷だろう。

「とりあえず西園はエタブリを覚えるところから始めよう」

西園は山属性だからとりあえず電気タイプみたいな技をよく覚える気がする（ゴッドハンドなどを見て）

「エタブリ……ですか？」

「ああ、吹雪士郎さんの使える必殺技のエターナルブリザードだ」

個人的にボルテッカーとかさういった技を覚えさせたい。え？ぶつとびジャンプ？  
かつとびディフェンス？知らない子ですなあ。勝手に特訓して習得してください（投げやり）

「はい！僕、頑張ります！」

とりまめざ氷から教えます。天馬は放置しても強くなってくれるのである程度強くなつてからテコ入れとも考えなければ、主人公補正があるので喝を入れるのはキャプテンに彼がなつてからにしようと思えました。

因みにですが、シユート練を受けていたら剣城が乱入してきました。なんでやねん。こんな展開はなかったやろ！

## 牙を剥くSNGK。壊れたのは原作でした。

どうもSNGKです（気さくな挨拶）

サンドバックの練習をしていたら剣城がやってきました。一体どうしたのだろうと  
思っているとこちらに向かってデスソードを打ち込んでくる。

「デス……ソードォー！」

1カメラ！2カメラ！3カメラ！という文字が頭の中によぎるが俺はここでフライング技  
を使おうと企んでしまう。

「三国先輩！」

松風が危ないと言わんばかりにこちらに言ってくるが俺はただ単純に首をそらして  
シュートをゴールインさせる。まさにアニメにてENDUがやってみせた技だ。昔か  
らこんなことがやってみたかったので夢が一つ叶ったまである。

「なっ！」

個人的なイメージとしてクールな剣城がやけにイラついてこちらに入ってくるとこ  
ちらの前に立って一言いつてくる。

「貴様、なんで俺のデスソードを必殺技もなしで止められた。今のだって軌道を見切っ

ていただろう」

いや、あれは事故なんです。なんてふざけた発言をしたら周りからクソザコブロッコリーの名称をつけられてしまうだろうと考えた俺はせつかくだという事で剣城も魔改造することにした。

「打ってこいよ剣城。お前の全力ってやつを見せてみな」

そう言っただけ俺は剣城の足元にボールを渡す。周りが三国には止められないドとか無理だとか囁かれているがそんなこと知らない。最悪アームドからのバイシクルソードでもデビルバーストでもなんでもこいや！と思っただけなら完全にロストエンジェルの構えです。あまりにも挑発しすぎたようです。

「ロストエンジェル！」

剣聖ランスロッドの剣から黒いレーザーみたいなのが飛んで来る。いや、ここで使っちゃうのかよ化身シュート……ここは特訓の成果を見せるタイミングだ！

「これが俺の本当の必殺技だ！無頼ハンド！」

俺はこれからのインフレに対抗するために既に最強の無頼ハンドを身につけたのだ。え？ゴッドハンドXがあるだろうって？はっはっはー知らんな。

周りからは三国防いだ！と騒がれた。まあ、バーニングキャッチとか言うクソザコ技

しか今まで使って来てなかったから仕方ないのかもかもしれないがこの反応色々くるものがある。

「剣城、お前のサッカーは分かった。だがな……お前が本当に望んだサッカーを俺にぶつけない限り俺は負けてやるほどあまちゃんではない！」

え？お前最初破られてるじゃんとか言わないで。あれは演出上仕方ないからね。うん。そしてさりげなく優一さんのことをほのめかす。奴がうまく変わってくれるといいのだが……

「お前に何がわかる！」

「わからねえよ。分かりたくもないね」

俺は諭すように剣城に話しかける。原作崩壊なんて知りません。と言うより剣城のような人外サッカーをやるプレイヤーの本気を見てみたいが故に俺は油を注ぐ。

「お前のやつてることは本当に相手が望んでいるのか？そのために手を汚してでも勝ち取ってほしいと頼まれたのか？思えば上がるのもいい加減にしろよ」

俺がそう煽ると怒りの力が増してデスソードが進化したシユートを俺に向かって放とうとボールを回転させながら踵で上に蹴り、オーバーヘッドキックをかましてくる。



「うおおおおお！デス……ドロップ!!」

「ここでしたかりと止めなきや漢じゃないよな!」

そう言つて俺は伝説のキーパー技を出す構えをする。Xを身につける時の副産物だ  
が俺の今のステータスなら今の剣城は止められるはずだ。え?アウト・オブ・眼中?俺  
はソニックショット以外には使わないよ?

「ゴッドハンド改!」

「くそおおお!」

そう言つて俺は赤いゴッドハンドを繰り出す。そのオーラなどに周りは更にざわめ  
く。音無先生に関しては驚きすぎて口が開いている。綺麗な顔が台無であるの一つ心  
の中でボケる。一方でがっちりとしゅーとを止められた剣城は悔しそうな表情をしな  
がら立ち去つていく。……これではやくこちら側に来てくれるかな?と淡い期待を少  
し込んでいると歓声上がる。

「三国凄いだ!」

「三国、あんな技持つてたんですね」

「三国先輩!あれは伝説のゴッドハンドじゃないですか!」

AMGや霧野、松風などがワイワイと近寄つて来て質問責めにされた。個人的にエル

ドラドチームにてSNGKキーパーの時にフェイが裏切って云々の時でも負けないみたいな展開にしたい。なんなら2人が親子だつて言うフラグを早くから知らせたいものである。

「実はひっそり特訓してたんだ。凄いだろー」

とりあえず今だけは調子に乗っておく。側から見たらお前は剣城の何を知っているんだとか周りから目をつけられそうで怖いので適当に振舞ったとさ。ちゃんちゃん。

+++++

「君が三国太一君だね」

「お前は……g……イシド聖帝」

なんと表面上のラスボスが革命前にも関わらず俺に接触して来ました。俺が帰宅するのを狙つての襲撃だろう。

「我々ファイブスセクターが君のような才能と実力を持っている人間を見逃していたとは実に惜しいことをした」

暗に人事部仕事しろやと文句を言っているのだろうか。と言うより豪炎寺さんマジ見た目ホスト過ぎて。あの髪型にするのにどれだけのワックスを使っていたのか気に

なるものだ。

「それで、聖帝は何の用で？」

「三国太一君。ファイブセクターに付かないか？」

まさかラスボスが直々に勧誘してくるとは嬉しいのか嬉しくないのかわからないものがある。

「つまり俺にシードとして雷門に居ろと。剣城がいるにも関わらず」

「ああ。彼のお兄さんが我らの管理サッカーを望んではいけないのでな。どうせ直に離れるだろう」

なんだかんだで結構周りを見るのな、豪炎寺。と言うよりもファイブセクターの黒幕は千宮路であり、豪炎寺はなんだかんだでみんなのために内部調査を行っていたりと白だ。

「そうですね。豪炎寺さん直々のお誘いですし乗らせていただきます。豪炎寺さんからシユートやドリブルといったフィールドプレイヤー、ストライカーというものも教わりたいですし」

「……俺はイシドシユウジだ」

「バレバレですよ。前イナズマジパンの人達がファイブセクターに反旗を翻しているのに貴方が悪にいるのは明らかにおかしいですから」

「豪炎寺さん。大人しく話すのが良いかと思えますよ」

まさかのくぎゆうまで登場である。というか原作崩壊甚だしいなこれ！

そうしてファイフスセクターの云々を説明してもらった。勿論オフレコだというのを前提に俺はちよくちよくとフィールドプレイヤーとしての実力も上げていくのだった。

あ、シードとしての仕事は雷門が今どんな状況を伝える仕事でした。状況次第で対戦校を変えるためらしいですが内心では順番を知っているのでデメリット無しでSNGKが進化するという展開になるのでした。

# 教祖ENDU現る

どうもS N G K ( r y

俺がフィフスの手先となった数日後に栄都学園との練習試合となった。勝敗指示は0―3と雷門の敗北だ。

「すまないが三国。3点失点してくれ」と豪炎寺さんに言われたので世間体的な意味でも点は奪われるしかない。それにしても千宮路一家は確かサッカーがやりたかったのに出来なかつた。だから「管理してみんなに平等」と言つてたはずなのだが、これではサッカーというよりただの蹴りだ。というより奴は豪炎寺さん……いや、イシドシユウジが何をしてきたのかを監視してたら彼の目的がわかるはずなのだが、最終戦までわからないあたり無能の極みなのだろう。と言うかキングバーンよこせ。

「まあ、試合は1―3で終わったんだけどな」

「三国、何を言ってるんだ？」

「いや、なんでもない」

そう、神童のやつがラストパスでノーマルシュートを放つたのだ。相手は俺よりもザルだったためシュートが決まったのだ。それにしてもGOのキーパー弱すぎませんか

?と言うか隣にいるK R M D、お前少しはシュートブロックに参加しろ。A M Gは縦版の万里の長城を身につけさせたから利用価値はあるが、お前はシュポシュポ言ってるだけ……

シュポシュポしながらボールに向かわせるぞと何度言ったらわかるのか。

「さて、俺は円堂さんの所に向かうかな」

「三国!」

「K R M D、見るべきものは目の前じゃない、その先だ」

車の運転だつて人生だつて目の前だけを見ているようじゃダメだ。特に俺の場合円堂さんにキーパーとしての技術を教えてもらいたいというのがある。

円堂さんに豪炎寺さんと言った旧イナズマジャパンの2人から指南を受けられる段階で俺は最強だ。

ゴッドハンドXや爆熱スクリューと言った過去作の必殺技でかつ属性一致を意識して特訓してるのだから強くなれなかつたらマズイワケだ。

「三国、お前には何が見えてるってんだ」

「……何も見えてないかもしれないな」

S N G Kになつてからというもの色々な必殺技を習得してオリジナルの強さを手

に入れている自信はある。だが、これが本当にクソザコブロッコリーで良いのかと少し疑問に思うこともある。

アニメの製作上下派手なシユートをキーパーが決められてこちらのエースストライカー達が逆転する。これが世界編の段階からの演出で、それを崩してよかったのかなどと考えてしまうことがあるが俺はもう戻れない。ついてこれるやつだけついてこい!! 狼狽えるな!! と心に言い聞かせる。

「……三国、俺も行くぜ」

……K R M Dはサッカーでは使えないが、リアル生活では良い親友である。

††††††††††

俺とK R M Dが訪れた時は剣城がデスソードを放った後だった。俺たちもシユートを打った後に最後に剣城だ! だったと記憶してた俺は驚いてしまう。

「遅いぞ! S N G K! K R M D!」

ん? 呼び方に違和感を少し感じたが俺はスルーする。

「お前らもシユートを放つんだ!」

そう言われるとK R M Dはシユートを放ち、残りは俺1人になった。

円堂さんは相変わらずゴールの前にいるため俺は円堂さんにシュートを打つということだ。

「……まさかこの光景とは。すげえな」

最強の教祖である円堂守。彼とサッカーができると思うと胸が熱くなってくるものだ。

「いきますー！」

そう宣言すると俺は左腕を後ろに捻って半身になり、回転して豪炎寺さんとの特訓で覚えた必殺技を放つ。

「爆熱スクリュー!!!」

その技を見た瞬間剣城がこちらをすげえ顔で見たのはここだけの秘密だが、皆が三国がこんな技を持っていることを知らないが故に驚きの声をあげまくる。

「ふっー！」

そういうと円堂さんは両手で爆熱スクリューを止めてくる。

レベルの差があまりにも酷かったのだらう、必殺技を素手で止められてしまった。これはなかなか精神にくるものだな……

「三国！凄いやシュートじゃないか!!」



「ありがとうございます！」

とは言ってみたもののやはり豪炎寺さんのような威力は出ない。昔はフィールドプレイヤーもやってたのだが、ストライカーとしての才能は開花しなかった。やはりザルキーパーとしての未来が決まっていたのかと考えてしまうがその考えを放棄する。

「さあ、みんな。サッカーやろうぜ！」

俺は伝説の言葉であるサッカーやろうぜの言葉を聞きながらこれからのあり方を考えてしまうのだった。

## キャプテンってのはだな

皆さまお久しぶりウオツシユ。S N G Kです。

皆がサボりを決める中、俺はまじめに朝練をこなし、その日の学校を過ごしていると神童からサッカーをやめたいと相談されてしまった。

「神童。それがお前の意思なのか」

「三国先輩。チームに迷惑をかけてしまった以上……俺は……」

とても悔しそうな表情をする神童。無論こうなることはわかっていたのだが俺はどんな声をかけてやれば良いのかと考えてるとどうしても天馬と会えという言葉しか出てこない。それだけ彼が与える影響は強いのだと思うと俺がちっぽけに見えるが俺には俺のできることをすべきだと考え直す。

「なあ神童。朝練がないおかげで時間があるし俺がなんでキャプテンを譲ったかの話をしようじゃないか」

そう言っただけ俺は回想を始める……

俺は小学生だった頃はリベロをやっていて、あの時は純粹に：自由にサッカーをやっていたんだ。しかし、中学サッカーを始めたらこの管理サッカーという有様、俺は非常に残念だと思った。だから俺は自由を求めたりベロではなく守護神。俺たちのサッカーを守ると言う意味でゴールキーパーになったんだ。こう言ってしまうのもなんだが、チームの中でも俺は飛び抜けて実力者だったから1年の秋には1軍と2軍を行き来しながらも上に信頼を寄せてもらえるキーパーになった。そんな俺が2年に上がった時にそんな俺よりポテンシャルの高い選手である神童が入部してきた。それから言うもの俺は神童が上達するように久遠監督に掛け合っただ。そして俺が3年になる頃には神童がキャプテンになれるように俺は立ち振る舞ってきた。それがある意味神童に対して今回の壁にぶつかって折れかけた状態に追い込んでしまったのかもな。

そう言つて俺が笑うと神童は気まずいのか目をそらす。

「神童、お前が見るべきものは俺じゃない。松風だ」

「あいつが……う？」

「あいつの目。みてみるよ」

ただひたすらに純粹で真っ直ぐでサッカーが大好きだと。本人が言っていたがまともな環境でサッカーするのは初だと。

「ただひたすらに楽しいサッカー。それは今の環境で失われたものだ。今が闇ならあいつは光。奴の眩しさにあの時お前は惹かれてしまったのさ」

一度松風と向き合ってみるよと言って俺は立ち去る。……頑張れよ。原作主人公！

事の顛末として報告するならば、結果として松風がそよ風ステップを完成させて神童も帰ってきたという雷門の強化にて終わったのだ。それと同時に豪炎寺さんからの連絡に思わず顔をしかめてしまった。

『ホーリーロード1回戦。雷門は天河原中との試合は0-2で雷門の負けを指示した。雷門の維持、ガッツを楽しみにしてる』

とんでもねえことをしてくれやがったなとぼやきたくなかったのは俺だけじゃないはずだ。

……やはり前回の命令違反への懲罰という名目もあるのだろう。円堂さんは隠すだろうけれど剣城は神童にリークするだろうし結局はチームにその事実が流れてしまうと考えると今のプラス傾向が減ってしまうと考える。

「やはり作り出すしかないな……俺だけの必殺技を！」

フェンス・オブ・ガイアや無頼ハンド、ゴッドハンドX、タマシイ・ザ・ハンドと言っ

た既存の技ではない俺だけのを……

## あんかけ蟹チャーハン

どうもSNGKです

天河原との試合は0―2で負けというのを劍城君にバラされてしまいました。非常に空気が悪くて現在進行形で辛いです。

「この試合、勝ちに行く！」

教祖さまからの宣言に周りかどよめく。ここは俺が行くしかない！

「円堂監督。将来のためのサッカーは本場のサッカーではないという事ですか？」

「そうだ。サッカーってのは本来そういうものだ」

ここだけの話、豪炎寺さんからは追加メールが来ていた。

『円堂を徹底的に追い詰めてみる』と。非常に困った頼みすぎて悩んでいる。

「円堂さん。今更現れて革命を起こしますと言われて簡単に皆が頷くとおもいますか？俺たち3年生は進路の安泰を望んで好きでもない共産主義のサッカーで我慢してきたのに」

俺は真顔でENDU教祖にぶつける。

実際松風天馬が主人公な以上彼が来てから物語が動くのはわかっているのだが、正直

今更感があるのだ。

「それは……」

多くのイナイレ作品において円堂守にアンチヘイトをぶつけた作品は無いと思うんだ。

「貴方のサッカーやろうぜは悪魔の呪文です。俺たちは本当に悪魔の誘いに乗っても良いのか考えさせてもらいます」

そう言つて上級生組を引き連れて俺は立ち去る。

マジレスすると円堂監督は憧れだしむしろ憧れじゃなかったらゴッドハンドなんて覚えなない。

「SNGK、よかったのか？あんなに言い放ちまってる」

「そうだよ。俺たちも思っていたけれどあそこまで……」

AMGとKRRMDは心配そうに言ってくるが俺はそのまま帰宅して豪炎寺さんに指定された所に向かったのだった。

「随分な言葉を発したんだな」

豪炎寺さんから最初に言われたのはこれだった。

「豪炎寺さんのせいですからね。必殺技の開発、手伝って貰いますよ」  
俺が作り出す必殺技の型はできている。

まず右腕を上に入れて炎を掴む。その後身体を捻って炎を掴んだ右腕を後ろに下げ、頭の上に構える。そこでパワーが100パーセントになったと感じたらタイミングを合わせてボールに向かって手を突き出す。

「ごちゃごちゃ述べてみたが、要するにアレスの天秤版マジン・ザ・ハンドだ。こいつを俺はエンテイ・ザ・ハンドと名付けた。」

「はああああ！エンテイ・ザ・ハンドオ！」

威力としては無頼ハンドと同じぐらいだろうか。満足度が高いわけではないが、GO 1期では最強クラスなのは間違いない。

「随分とゴリ押しなキーパー技だな」

「バーニングキャッチの進化系ですよ。化身とはまた違った形ですけれど後ろに炎帝が出てきますし対化身用つてのもありますね」

簡単な話、タマシイ・ザ・ハンドを2まで使わないでインフレ環境に待ったをかけたいただけだ。

このエンテイ・ザ・ハンドを極めたらさらに進化させたいしまだまだ俺は頑張れるはずだ。



「では、試合当日。楽しみにしているよ」

夕暮れまで練習し、暗くなってきたので豪炎寺さんと別れ、今日は得意の炒飯にするかと考えながら帰宅していると河川敷に松風が座っていた。

「松風か？」

「あ、三国先輩」

「あの……三国先輩はどうするんですか？」

あれだけ厳しいことを監督に向かって言い放ったせいか松風は気まずそうに聞いてくる。

「そうだな……うちに来い。飯を食いながら少し話そう」

松風から料理ができることに驚かれたのだが、さっさと行くぞと促して連れていくのだった。

「まず始めにいうと、俺は最初から勝つ気しかない」

その言葉に驚愕としか言わざるを得ない顔になる松風。なぜあのようなことを言ったのかわからないような顔をする。

「何故円堂さんにあんなことを……って顔をしてるな」

「はい……。あの言葉を聞いて俺が自由なことをするのは悪いことなのかって考えました」

「簡単さ。円堂守っていう存在は最強のキャプテンなんだ。圧倒的に闇を焼き払うぐらゐの光。これは暗い感情を持つやつにとつては円堂守が絶対悪になってしまふ。俺が言ったのはK R M D達の中に溜まっていた部分をぶつけたのさ」

「誰だつてあんな共産主義なサツカーを終わらせてほしいと誰よりも願つていた。だからこそ指示のないサツカーを望んでいたし今でも望んでいる。しかし、それを壊そうとするのは誰だつて怖いし平穩が失われてしまふかもしれない。平穩が失われたときとその責任は誰に？ 事の発端者？ それとも縛り付けた大人？ 全ては監督に向かうのだ。」

「10年ちよいだが長く生きる彼が本当に責任を持つて導けるのかを聞いてこいというのが豪炎寺さんの本音なのだ。」

「回りくどいし、俺も正直めんどくさい言い回しをしたなつて思うけれど後悔はしてない。」

「なるほど……。うわあ！」

「そんなこんなで出来上がったのは館掛けカニチャーハン。俺の中で得意料理の1つだ。」

「熱いうちに食べな」

「んっ！美味しいです！凄い！」

「美味しく作るコツは炒飯の味付けを控えめにする事、そして餡の水気を抑えてしつかりとろみをつける事だ」

2人で飯を食っていたら母親が帰宅して色々な話をしたが割愛させてもらう。強いというならば、松風にシユート技を獲得するといいかもなつてアドバイスをしたのだつた。

……キツク力は低いけれどエクスカリバーあたり覚えてもらうのもありだな